

紅梅 こうばい

その頃按察の大納言と聞ゆるは、故致仕の太政大臣の次郎なり。失せ給ひにし衛門の督の弟にて、御覺いとやむごとなかりけり。北の方は亡くなりて、今おはしますは、後の太政大臣の御女、眞木柱離れ難くし給ひし女君にて、御祖父式部卿の宮、兵部卿の宮にあはせ給へりしが、宮失せ給ひて後、この大納言通ひ給ひけり。故兵部卿の宮の御形見に女君一所おはします。大納言の御子は故北の方の御腹に、女御子二所のみぞおはしければ、さうくしとて、神佛に祈りて、今の北の方の御腹にぞ男君一人まうけ給へる。一の姫君は春宮に參らせ給ひ、二の姫君を匂の宮にと志して、折々その氣色はのめかし給ふ。東の端に、軒近き紅梅のいと面白く匂ひたるを一枝折りて、若君の内裏に參らむと、宿直姿にて參り給へるに持たせて、宮に奉り給ふ。

○本篇の題はこの「紅梅」による。

枝の様、花房、色も香も世の常ならぬに、宮うちも置かず御覽じ給へど、御心は故宮の姫君に染み給へりければこの若君を常に纏はし給ひつゝ忍びやかに御文あり。母北の方は宮いといたう好きくしくおはしませば、なかくに物思や添へむと、母君よりぞ、たまさかに辱きはかりに御返奉り給へる。

竹河 たけかは

後の太政大臣は、玉鬘の女君の御腹に、男御子三人女御子二人なむおはしけるを、様々にかしづき立てむと思し、年月の過ぐるも心許なかり給ひし程に、太政大臣あへなく失せ給ひにしかば、女君、夢のやうにて、姫君達をいかにもてなし奉らむと思し亂るゝに、内裏よりも仰言絶えず、院よりまた懇に宣ふ。この姫君、御容貌いとようおはする聞えありて、心掛け給ふ人多く、右の大臣の三郎にて、藏人の少將とかいひしは、三條殿の御腹にて、兄の君達よりもいみじうかしづき給ひ、人柄もをかしかりし君、いと懇に申し給ひ、母北の方の御文もあり、御父大臣も切に聞え給ひけり。この三條の御殿は、かの入道の姫宮の三條殿といと近き程なれば、薫中將もさるべき折々の遊び所に、君達に引かれて見え給ふ時々あり。人々、この姫君の御傍にさし並べて見ゆ。などさやけど、中將は言少なに、いとまめやかにおはす。

正月二十餘日の頃、梅の花盛なるに、中將の君、藏人の少將引きつれて、姫君の御弟、藤侍従の君の御許におはしたりしに、西の渡殿の前なる紅梅の木の下に立ち寄れば、御身の香、花よりも著く、さと匂ふ。少しうち解けて遊び給へるに、御簾の内より和琴さし出でたり。中將掻き鳴らし給ふ聲、いと響多く聞

ゆ。母北(玉置ノ女君)の方、「怪しう故督(初木)の君(初木)の御有様(御有様)にいとよう似給ひて、琴の音などもたゞそれとこそ覚えつれ。」と泣き給ふ。少將も聲いと面白うて、「さき草(藤原)」謠ふ。藤侍(藤原)従は父太政大臣(元朝ノ右大臣)に似奉り給へる故にや、かやうの方はまだ若けれど、責められて、「竹河(藤原)」を聲に出だしてをかしく謠ふ。

○本篇の題はこの「竹河」による。

三月(三)になりて、御前(御前)の花の木どもの中にも匂優りてをかきし櫻を、姫君達(姫君)幼くおはせし時、「この花は我がぞ。」「我がぞ」と争ひ給ひしを、父太政大臣(父太政大臣)は、「姉君の御花ぞ。」と定め給ひ、母君は、「若君(若君)の御木。」とことわり給ひしを思ひ出で、この争ひ給ふ櫻を賭物(賭物)にて、「三番に數一つ勝ち給はむ方に、花を寄せむ。」と戯れ交して、姫君達(姫君)碁打ち給ふ。暗うなれば端近うて打ち果て給ふに、妹の君勝たせ給ひぬるを、例の藏人の少將、藤侍(藤原)従の御曹司(御曹司)に來たりけるが、廊の戸の明きたるに、やをら寄りて覗きけり。かう嬉しき折を見つけたりと思すも、はかなき心になむ。院(院)よりは御消息(御消息)日々(御消息)にありければ、母北(玉置ノ女君)の方辱しと、さ思し立ちにけり。藏人の少將は死ぬばかり思へど甲斐なく、北(玉置ノ女君)の方もいとほしと聞き給ふ。四月九日(四月九日)にぞ參り給ふ。中宮、弘徽殿(弘徽殿)の女御(女御)など皆ねび給へるに、姫君のいと美しげなる様を見給ふには、なとて疎ならむ。明くる年の卯月(卯月)に女宮生れ給ひぬ。院の御子は、女御の御腹に女宮たゞ一所おはしましたければ、いと珍しう、いとたゞこなたにのみおはします。内にはかくと聞し召し、誠に物しと思しつゝ、度々御氣色(御氣色)ありと、人の告げれば、北(玉置ノ女君)の方煩はしくて、中の姫君(中ノ姫君)に尙侍(尙侍)を譲り

て、御宮仕(御宮仕)せさせ給ふ。姉君は年頃ありて、また男御子(男御子)生み給ひつ。院いと心殊に思し給へば、弘徽殿(弘徽殿)の女御も御心動(御心動)き給へば、おのづから御中も隔るべかんめり。その頃左の大(左ノ大臣)臣(大臣)なりし人失せ給ひて、右の大(右ノ大臣)臣(大臣)、左に上り給ひ、薫中將は中納言になり給ふ。

橋 姫 はしひめ

これより終まで十帖を、「宇治十帖」といふ。

その頃世に數まへられ給はぬ古宮(古宮)おはしけり。北の方は昔の大(昔ノ大臣)臣(大臣)の御女(御女)にて、深き御契(御契)ばかりを憂き世の慰めにて頼み交し給へりしが、さしつゝ(二葉目ノ)きて女君の生まれ給ひし時、いたく煩ひて失せ給ひぬ。宮あさましく思し歎きて、御本意(御本意)も遂げまほしうし給ひけれど、幼き姫君達を心許なう思したゆたひつゝ、年月經給へり。この宮は、源氏の君の御弟にて八の宮(八ノ宮)と聞えしが、院(院)の春宮(春宮)におはしまし、時、太后(太后)、この宮をこそ春宮(春宮)にと、横様(横様)に思し構へ給ひける騒に、源氏の君の御族(御族)などに疎まれ給ひ、今は限りとよろづを思ひ棄て給へり。かゝる程に住み給ふ宮焼けて、移ろひ給ふべきよろしき所もなかりければ、宇治といふ所に由ある山里(山里)持ち給へりけるに渡り給ふ。耳かしがましき川のわたりにて、靜かなる思にかなはぬ方もあれど、いかゞはせむ。いとゞ山重(山重)なれる御住所(御住所)に尋ね參る人もなく、花紅葉、水の流を、

心を遣る便に寄せてながめ給ふより外のことなし。こゝにこの宇治山に聖めきたる阿闍梨住みけり。才いと賢くて、この宮のかく法文などを讀み習ひ給へば、常に参りけるが、院にも親しくさぶらひて、御經など教へまゐらす人なれば、この宮の悟り深く物し給ふことなど奏するを、薫中將も御前にさぶらひて、耳止めて聞き給ひ、かたみに御消息通はして、御自ら訪ひ給へり。げに聞きしよりも哀れに、いと荒ましき水の音、波の響に、夜なども心解けて夢をだに見るべき折もなげに凄く吹き拂ひたるに、姫君達何心地して過し給ふらむと推し量らるゝ御有様なり。宮は、佛の御教も耳近き譬に引き寄せ、いとこよなく深き御悟にはあらねど、物の心得のいと殊におはしませば、中將も常に見奉らまほしく覺え給ひて、折々訪ひまゐらせつゝ、三年ばかりになりぬ。

秋の末つ方、かの阿闍梨の御堂に移ろひて、四季にあてし給ふ御念佛を、七日の程行ひ給ふ程、姫君達はいと心細く、つれづれまさりてながめ給ひけるに、中將の君、久しく参らぬかなと思しけるまゝに、有明の月のまだ夜深くさし出づる程、御馬にておはしけり。近くなる程に、その音とも聞き分かぬ物の音どものいと凄げに聞ゆるに、よき折なるべしと思ひつゝ入り給へば、琵琶の聲の響なりけるに、箏の琴あはれになまめいたる聲して絶えなく聞ゆ。君は宿直人めく男に語らひて、竹の透垣の戸を少し押し明けて覗き給ふ。月をかきし程に霧り渡れるを眺めて、籠を少し巻き上げて、内なる姫君達、一人は少し柱に居隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝ居たるに、雲隠れたりつる月の俄に

いと明くさし出でたれば、「扇ならで、これしても月は招きつべかりけり。」とて、さし覗きたる顔、いみじうらうたげなり。今一人は琴の上に添ひ臥して、はかなき事をうち解け宜ひ交したる、いとあはれに懐かし。ありつる宿直人して、さりげなく、「折悪しく参り侍りにけれど、御琴の音なか／＼嬉しく。」など宜へば、姫君達はいと恥かしと思す。老女房一人起き出で、来て、几帳の側より君の狩衣姿を覗き見て、うち泣きつゝ、「いかならむ序にか昔の御物語聞えさせむと思ひわたり侍る験にや、嬉しき折に侍る。」とうちわな／＼く。君は怪しと思すに、「故衛門の督殿の乳母に侍りしは、おのれが母になむ。今は限りになり給ひにし御病の末つ方に、おのれを召し寄せ給ひて、聊か宜ひ置くことなむ侍りし。」などいふに、いとゆかしけれど、夜も明け行けば、「さらば必ずこの残り聞かせ給へ。」と契りて出で給ふ。大君に

橋姫の心をくみて高瀬さす

棹のしづくに袖ぞ濡れぬる

○「橋姫」は、宇治橋の姫君にて、こゝは姫君達をいふ。

○「姫君達の寂しさを思ひ遣れば、烈しき瀬に棹さす棹のしづくの如く、涙に袖を濡らす。」

○本篇の題はこれによる。

老人の物語、心に掛りて思し出でらるれば、十月になりて五六日の程に宇治に参り給ふ。宮、さまざ

まの御物語の序に、姫君のこと宜ひ出で、（我が一生）「これのみこそ世を離れむ際の絆なりけれ。」とうち語らひ給へば、中將、「暫しも長らへ侍らむ命の程は、疎々しからず思し召されなむと思ひ侍り。」など申し給へば、宮はいと嬉しと思す。さて曉方、宮の御行し給ふ程に、かの老人召し出で、逢ひ給へり。辨の君とぞいひける。年六十に少し足らぬ程にて、「故衛門の督殿空しうなり給ひし騒に、母に侍りし人もやがて病づきて、程も經ず失せし後、おのれは西の海の果までまかり下りしが、男もかしこにて失せ侍りにし後、十餘年にてなむ京に歸り侍り。」と申す。さてさゝやかに押し巻き合はせたる反故どもの黴臭さを、袋に縫ひ入れたる、取り出で來て奉る。歸り給ひてまづこの袋を見給へば、色々の紙にて、たまさかに通ひける御文の返事五つ六つぞある。紙魚といふ虫の住所になれど、跡は消えず。たゞ今書きたらむやうなる言の葉どもの、細々と定かなるを見給ふに、いとほしき事どもなり。かゝること世にまたあらむやと物思はしき添ひて、母宮の御前に參り給へど、宮は何心もなく若やかなる様して經讀み給ふに、よろづ我が心一つに籠めて思ひ給ふ。

椎 本 しひがもと

二月の二十日の程に、句の宮、初瀬に詣で給ふ。宇治のわたりのこと、中將の君より聞き給ふに、

かしく思して、かしこに御中宿と思し召すなるべし。上達部（公卿）殿上人残る人少なう仕うまつり、中將の君も參り給ふ。夕つ方ぞ御琴など召して遊び給へば、かの八の宮も、追風に吹き來る響を聞き給ひ、中將の君に御文あれば、句の宮、「この返は我せむ。」と宜ひて奉り給ふ。君はやがてかしこに訪ひ給ふ（八ノ宮ヲ）き、宮は羨しと思せど、京より御迎の人も參れば、またさるべき序してと思して歸り給へり。宮より姫君に御消息あれば、大君、中の君に御返聞えさせ給ひぬ。かくて大君は二十五、中の君二十二にぞなり給ひければ、父宮は且暮思し亂る。中將、中納言になり給ひしはこの秋なりけり。「宇治に參らで久しうなりにけるを。」と思し出で、參り給ふに、都にはまた入り立たぬ秋の氣色を、音羽の山の近ければ、風の音もいと冷やかに、横の山邊も僅かに色づきぬ。宮は例よりも待ち喜び給ひ、「亡からむ後、この姫君達を、思ひ棄て給はぬものに數まへ給へ。」と宜ふに、中納言、「更に思ひ怠るまじくなむ。」など宜へば、宮はいと嬉しと頼み給ふ。

秋深くなり行くまゝに、宮はいみじう物心細く覺え給ひければ、姫君達にも、「我が身一つにあらず。過ぎ給ひにし母君の御面（麗ニ）伏に、輕々しき心ども使ひ給ふな。」など、さるべきことゝも言ひ置き給ひて、かの阿闍梨の御堂に籠り給へり。かくて今日果てぬらむと待ち給ふ夕暮に、人參りて、「今朝より惱ましうせさせ給ふ。」と申せば、胸潰れて、御衣ども綿厚くして奉りなどし給ふに、八月二十日の程、鐘の聲かすかに響きて、明けぬなりと聞ゆる程に、人來て、「この夜中ばかりになむ失せ給ひぬる。」と

泣く／＼申すに、姫君達、あさましく物覚えぬ心地して、たゞうつぶし臥し給ふ。中納言殿も、かくと聞き給ひて、いとあへなく口惜しく、いみじう泣い給ひ、御弔細やかに聞え給ふ。姫君達、明けぬ夜の心地ながら、日數経ぬれば九月にもなりぬ。句の宮よりも度々御消息あれど、上べばかりに御返など聞え給ふ。年も暮れにければ、中納言の君は、新しき年はふと訪ひまゐらせざらむと思しておはしたり。雪もいと積れるにかくおはしましたる、淺からず思ひ知らるれば、大君例よりは心して御物語などせさせ給ふに、中納言もかくてはえ過すまじく思しなり給ふ。思ふこと少しかすめ宣へど、御答はなし。歸り給ひなむとて、故宮のおはしまし、方明けさせ給へれば、塵いたう積りて、佛のみぞ花の飾衰へず、行ひ給ひけりと見ゆる御床なども取り拂ひたり。

・立ち寄らむ蔭と頼みし椎が本

空しき床になりけるかな

○「椎」は僧衣の染料とす。「椎が本」は、八の宮をいふ。

○「宮を頼みとして佛道を修めむとしたりしに、空しくなり給ひけり。」

○本篇の題はこの歌による。

明るる年は、常よりも暑きを、人々わぶるに、中納言殿、河面や涼しからむと思ひ出で、俄に参り給へり。故宮のおはせし西の廂に入りおはすに、佛の御前におはしたる姫君達、我が御方に歸り給ふ氣配

すれば、障子の端の方に懸金したる所に、穴の少し明きたるより見給へば、濃き鈍色の單衣に萱草(紅黄色)の袴のなか／＼華やかなりと見ゆるは、着給へる人柄なンめり。數珠引き隠して持ち給ひ、御髪は桂に少し足らぬ程ならむと見えて、末までつや／＼と美しげなり。また一人ゐざり出で給へるは、頭つき、今少しあてになまめかしき様にて、黒き袷(袷)一襲、同じやうなる色合の袷を着給へり。紫の紙に書きたる經を片手に持ち給へる手つき、前の人よりも細りて瘠せ／＼なるべし。何事にかあらむうち笑ひ給へる、いと愛敬づきたり。

總 角 あげまき

宇治の姫君達はあまた年耳馴れ給ひにし川風も、この秋はいと物悲しくて、御忌のこと急がせ給ふ。中納言殿と阿闍梨、よろづ仕うまつり給ひ、殿は御自らも参り給へるに、姫君達の、名香の糸引き亂り給へる、几帳の綻(綻)に透きて見えければ、

○名香の糸 佛に奉る爲に、種々の香を紙に包み、五色の糸にて結ぶなり。

總角に長き契を結びこめ

おなじ心によりもあはなむ

○「總角結びのやうに長き契を結び、同じ心に寄り合ひたし。」
○本篇の題はこの歌による。

その後も度々参り給ひて、恨みまゐらすれど、大君は、「今はとて故宮の宜ひし一言を違へじ。」とて、

○一言 輕々しく夫を持ち給ふなと戒め給ひしをいふ。

思ひ離れ給ひ、「我と同じことに思ひなし給へかし。」と、中の君を聞えつけまゐらす。されど中納言の君は、いかで思ふことをかなへてむと思して、一日かしこに参り給ひて、辨の御許を語らひ給へば、宵過ぐる程、風の音少し荒らかにうち吹きて、はかなき様の葎などひしくと音して紛るゝ程に、辨、導き入れ奉る。大君はうちまどろみ給はねば、ふと聞きつけ給ひて、やをら起き出で給ひ、いと疾く這ひ隠れ給ふ。中納言はかくとも知り給はず、うち見廻らし給ひつゝ、たゞ一人臥し給へるを、さる心してけるにやと嬉しくて、心ときめきし給ふに、やう／＼あらざりけりと見るに、美しくらうたげなる氣色は優りてやと覺ゆ。例の懐かしき様に語らひて明かし給へど、大君をいとつらう覺ゆれば、さまざまに思ひ廻らして、この中の君だに人に見え給はゞ、大君も思ひ弱りて我にこそ靡き給はめと思ひ寄りて、また在明の空もをかしき程に、匂の宮の御方に参り給ひ、二十六日彼岸の果にて、よき日なりければ、いみじう忍びて奉て奉る。宮をば御馬にて暗き紛れにおはしまさせ給ひて、辨召し出で、今暫し更かし

て、昨夜のやうに導き給へ。」といふ。宮は中納言の教ふるまゝに、戸口に寄りて扇を鳴らし給へば、一辨参りて導きまゐらせたり。中納言殿は大君に對面し給ひて、「今宵宮こゝにおはしつる。音もせでこそ紛れ給ひぬれ。」と宣へば、大君、思ひも寄らぬに、目もあやにいはむ方なく思ひ惑ひ給へり。殿、「今はいふ甲斐なし。宿世などいふものこそ更に心になはぬものなれば。」など宣ひて、隔てなりつる障子をも引き破りつべき氣色なれど、大君いとようこしらへ給へば、さすがにいとほしと思してあながちにも宣はず。いとゞしき水の音、夜半の風に、山鳥の心地して明かしかね給ふ。

○山鳥の心地 山鳥は雌雄谷を隔てゝ寝るといふ。

かくて暗き程にとて急ぎ歸り給へば、まだ人騒がしからぬ朝の程に京におはし着きぬ。中の君は、かく様々に思し構へ給ひながら、色にも出だし給はざりけるよ。」と、大君を恨み給ひ、目も見合はせせ奉らねど、大君は知らざりし様を明らか給はむはしたなう心苦しく思ひ給ふ。三日の日は、宮、夜中近うなりて、荒ましき風のきほひに、いともなまめかしく匂ひおはしたるを、いかゞ疎に覺え給はむ、正身も思ひ知りうち靡き給ふなるべし。
十月一日頃、網代もをかしき程ならむと、匂の宮、宇治の紅葉御覽すべく申し定め給ひ、中納言殿も例の仕うまつり給へり。

○網代 數多の竹又は木を編み、網に代へて魚を取るもの。

船にて上り下り漕ぎめぐり面白く遊び給ふもかなたに聞えて、ほのく見ゆるを、若き人々見めてまゐらす。宮は人静めてかしこにおはせむと思し廻らす所に、内裏より中宮の仰言にて御使など参り給へば、口惜しくて歸り給はむ空もなし。かしこに御文奉り給ふに、中の君「數ならぬ有様にてめでたき御あたり交らばむは甲斐なき事かな。」と恨み給ふ。宮は京におはし着きて後、立ち返り例のやうに忍びて出で立ち給ひけるを、上も聞し召して、嚴めしき事ども出で来て、内裏につとさぶらはせ給ひ、左(元ノ御大君)の大臣の六の女君を宮に参らせ給ふべく定めらる。

中納言の君は大君惱み給ふと聞きておはしたりしに、「苦しうて物もえ聞えず。」など宜ふを、限りなう心苦しうて歎き居給へりけれど、さすがにつれづれとかくておはし難ければ、いと心許なけれど歸り給ふ。御供の下人達、かの左の大臣の姫君、句の宮に定まり給へるなど、この人々に語りけるを、大君、聞き給ひて、いと胸塞り給ふ。十一月となりて少しよろしうおはすと聞き給ひけるに、公私物騒がしき頃にて、五六日人も奉り給はぬに、いかならむとうち驚かれ給ひて、急ぎ参り給ひ、御枕上近くおはして物聞え給へど、御聲もなき様にて答へ給はず。「かく重くなり給ふまで誰もく告げ給はで。」と恨み給ひて、御修法など事々しくせさせ給ひ、夜もすがら御湯など参らせ給へど、露ばかりも参る氣色なく、見るまゝに物の枯れ行くやうにて消え果て給ひぬ。中の君後れじと思ひ惑ひ給へる様も道理なり。

雪の掻き暮らし降る日、中納言殿、終日にながめ暮らして、世の人のすさまじきことにいふなる十二月の月夜の、曇なくさし出でたるを、簾巻き上げて見給へば、向の寺の鐘枕を敲て、今日も暮れぬと、かすかなる聲を聞きて、

後れじと空行く月を暮ふかな
遂にすむべきこの世ならねば

句の宮も御自ら訪ひ給ひ、御誦經など嚴めしくせさせ給ふ。中宮聞きつけ給ひて、心苦しう思し給ひ、中の君を二條院の西に渡し給ふべく、忍びて仰ありければ、句の宮もいと嬉しくて、「近く京に渡し奉るべきことをなむ謀り出でたる。」とかしこに御消息ありけり。

早 蕨 さわらび

山里にては春の光を見給ふにつけても、いかでかく長らへにける月日ならむと、夢のやうにのみ覺え給ふ。行き交ふ時々随ひ、花鳥の色をも音をも、同じ心に見つゝ、心細き世の憂さもつらさも、うち語らひ合はせしにこそ慰む方もありしかと、故宮のおはしまさずなりにし悲しさよりもまさりて戀しく思ひ給ふ。阿闍梨のもとより、例のことゝて早蕨、土筆を籠に入れて奉りたりければ、中の君、

この春は誰にか見せむ亡き人の

形見に摘める峰の早蕨

○本篇の題はこの歌による。

やがて京へ御移ろひあるべしと、よき若人、童女など求め給ふに、中納言より御車、御前驅の人々奉り、御自らもおはしたり。君は、我こそ人より先に思ひ初めしかなど、胸痛く思ひつゞけ給ひ、垣間見せし障子の穴も思ひ出で給ふ。辨は世を背きにけるが、こゝに残りぬべきを召し出で、「こゝにはなほ時々参り来べければ、かくて住み給はむは、いと嬉しかるべきことになむ。」など、いひも遣らす泣き給ふ。中の君も大君のもて使ひ給ひし、さるべき御調度どもなど、皆この人に止め置き給ふ。御車ども寄せて、御前驅の人々、四位五位いと多かり。道の程遙けく烈しき山路の有様を見給ふに、つらしとのみ思ひし宮の絶間も道理なりけりと思し知らる。宵うち過ぎてぞおはし着きたる。目も輝く心地する殿造の中に引き入るれば、宮、待ちおはして、御車のもとに寄せ給ひて下し奉り給ふ。

左の大臣は、六の女君を宮に奉り給はむこと、この月と思し定めたりけるに、かく思の外の人を、それより先にと申し顔に据る給へば、いと物しと思し、中納言にや参らせむと、さるべき人して氣色取らせけれど、「世のはかなさを目に近く見しにいと心憂く。」など宜ふ。花盛の程二條の院の櫻を見遣り給ふに、主なき宿の先づ思ひ遣られて、院に参り給へば、中の君、ありし世を思し出で、飽かず悲しう

思す。

宿 木

やどりき

その頃藤壺の女御の御腹に女二の宮おはしまし、上も心殊にかしづき給ふ。十四になり給ふ年、御裳着せさせ給ひ、御後見し奉るべき人を思し廻らし給ふに、源中納言より外に、よろしかるべき人またなかりけり。暮れ行くまゝに時雨時々をかき頃、中納言召し出で給ひて碁打たせ給ふ序に、ほのめかし給へど、中納言は、本意にもあらぬことと思す。左大臣殿聞き給ひて、帝だに婚求め給ふ世にと思して、六の君を匂の宮に奉り給ふ。宮はこの大臣にあまり怨せられむも心苦しきに、好きに御本性故、ゆかしと思されたり。年返りて八月ばかりにとその用意などし給ふを、中の君聞き給ひて、「さればこそ、必ず憂き事の出で來なむものぞ。」と歎き給ひ、「遂には山住に歸るべきなめり。」など思せど、さりげなくもてなし給ふ。この五月ばかりより珍しき様に惱み給ふ。中納言殿も聞き給ひて、「宮は花心におはせば、今めかしき方に必ず移ろひ給はむ。」といとほしう思すにも、何しに宮に譲りまゐらせたりけむと、返すく口惜しく思し給ふ。

左の大臣には、六條の院の東の大殿を磨きしつらひて待ちまゐらすに、十六夜の月やうくさし

宿 木

上れば、心許なしとて、御使あり。宮は中の君のらうたげなる御有様を見棄て、出づべき心地もせず、よろづに慰めて出で給ふを見送るに、女君、ともかくも覚え給はず。心憂きものは人の心なりけりと思ひ知らる。

宮は六の君の御有様見まらせ給ふに、いとゞ御志まさりにければ、中の君待ち遠なる折々あり、「いかでかの山里に忍びて渡りなむ。暫し心をも慰めばや。」と思し、中納言に御文あれば参り給へり。今日は御簾の内に入れ奉りて、母屋の簾に几帳添へて對面し給へり。近く寄り給ひて、山里に御移ろひのことなど宜ふ聲の、いみじうらうたげなるかなと、常よりも昔思ひ出でらるゝに、慎みあへで、寄り居給へる柱の下の簾の下より、やをら御袖を捉へつ。中の君、あな心憂と思ふに、中納言はいと馴れ顔に、半は内に入り給へれど、女君、「思の外なりける御心かな。」と泣きぬべき氣色に、男もよろづ思ひ返して出で給ひぬ。宮は日頃の怠り思し出でられて、俄に渡り給へば、女君の心美しき様にもてなし居給ふに、いとゞあはれに嬉しく思されて、限りなく宜ふ程、中納言の御移り香のいと深う染み給へるが、世の常の香にも似ず著き匂なるを、怪しと咎め給へど、女君、あさましくて、うち泣き給へる氣色の、限りなく哀れなれば、宮もえ恨み果て給はず、宜ひさして慰め給へり。中納言の君は、心にかゝりて苦しければ、御文など度々あり。しめやかなる夕つ方おはしまして、御物語の序に、「かの宇治のわたりに、わざと寺などとはなくとも、昔覺ゆる人形をも作り、繪にも書き取りて、行ひ侍らむとなむ思

ひ侍る。」と宜へば、中の君、「人形と宜ふ序に、怪しく思ひ出で侍れ。」とて、「年頃は世にあらむとも知らざりし人の、この夏頃遠き所よりおはしたる、怪しきまで昔の人の御氣配に通ひて。」など宜ふに、夢語かとまで聞き給ふ。

九月二十餘日の程、宇治に参り給ひて、御寺のこと掟て給ひ、辨召し出で、故衛門の督の君のことなど聞き給ふ序に、かの中の君の語り給ひし人形いひ出で給へり。辨、「故宮の北の方の失せ給へりける頃、中將の君とてさぶらひける人の女子をなむ産みて侍りけるが、常陸の守の妻になりて下りけるとなむほの聞き侍りし。二十ばかりになり給ひぬらむ。いと美しく生ひ出で給ふとなむ。」など申すに、ゆかしと思す。いと氣色ある深山木に宿りたる蔦の色ぞまだ残りたるを引き取らせ給ひて、中の君に奉り給ふ。

やどりきと思ひ出ですば木の下の

旅寝もいかに寂しからまし

○本篇の題はこの歌による。

二月の朔日頃に、中納言、權大納言になりて右大將かけ給ひつ。またの日の曉に、中の君平らかにて、男におはします。宮いと嬉しと思す。大將殿も、かくてはいとゞ我が方に疎くやならむと口惜しけれど、また初の我が心を思ふには、嬉しくもあり。藤壺の女二の宮は、三月に大將の三條の宮に渡り給ふ。そ

○夢に傳へし、昔の君（柏木）の笛にて、左大臣（夕霧大將）の夢に見えしこと、横笛の巻にあり。

賀茂の祭など騒がしき頃過して、二十餘日の程に、大將殿、例の宇治へおはしたり。造らせ給ふ御堂見居給ふに、女車一つ、下人数多く、橋より今渡り來る見ゆ。「常陸の殿の姫君」と申すに、「聞きし人なり。」と思し出で、車を寄するを、障子の穴より覗き給ふ。慎ましげに下るゝを見れば、頭つき様體、細やかにあてなる、いとよう思ひ出でられぬべし。車は高く、下るゝ所は下りたるを、やゝためらひてゐざり入るに、残る所なく見ゆ。やう／＼腰痛きまで立ちすくみ給へど、なほ動かで見居給へば、女君、辨の尼君の參りしに恥ぢらひて側みたる側目、こなたよりはいとよく見ゆ。まみの程、御髪、たゞそれなりと思ひ出でられて涙落ちぬれば、尼君して、「かく參り來合ひたるも契深く。」など傳へさせ給へり。

東屋 あづまや

宇治の尼君は、大將殿の宣ふまゝに、常陸の守の北の方に、度々ほのめかしけれど、北の方、「數にも

あらぬ身なれば。」と思ひ憚りて、左近の少將とて年二十三ばかりになれる人に許し給ひ、その急ぎするを、少將はいつしかと待ちわたる程に、ふと、「守の眞の御女にあらず。」と聞き出で、「かの守を後見にせまほしう思ひ初めたることなるに。」と、氣色悪しくなれば、改めて妹の君と定め、日くだに取り換へておはし初めけり。北の方、いと心憂しと思して、中の君に御消息し給ひ、人知れず出で立ちて二條の殿に女君を率て參り給ひ、乳母、若き人々二三人ばかりして、西の廂の北に寄りて人氣遠き方に局したり。

夕つ方、宮渡らせ給へるに、中の君は御ゆるの程なりけり。若君も寝給へりければ、宮はたゞすみ歩き給ひて、西の方さし覗き給ふに、中の程なる障子の細目に明きたるより見給へば、几帳の帷子一重うち掛けたるより華やかなる袖口の見ゆれば、押し明けてやをら歩み寄り給ふを人知らず。常陸の女君は前裁のいとをかしう、色々に咲き亂れたるを眺め居給ひしが、宮とは思ひも掛けず、例こなたに來馴れたる人ならむと思ひて起き上りたる様體いとをかしきに、例の御心に見過し給はで、衣の裾を捉へ給へり。「誰そ。」と宣ふに、女君はいと恥かしくせむ方なし。乳母かなたの屏風を押し明けて來り、「怪しき業にも侍るかな。」と咎めまゐらすれど、憚り給ふべきにあらねば、「誰と聞かざらむ程は許さじ。」と、馴れ／＼しく寄り給ふほどに、内裏より人參りて、「中宮この夕暮より御胸惱ませ給ふ。」と申せば、せむ方なくて、いみじく恨みて出で給ひぬ。女君は恐ろしき夢の覺めたる心地して、汗に押し

浸して臥し給へり。

母北の方聞き驚きて、「明日明後日物忌に侍れば。」など、申して、三條わたり(カケタル)に小さき家の造りさしたるに移ろはしまるらせて、「こゝはまたかくあはれて危げなる所なシゆり。さる心し給へ。」と、うち泣きて歸りぬ。旅の宿はつれづれに、庭の草もいふせく、慰めに見るべき前栽(前ノ木草)もなく、晴れづしからで明かし暮らすに、二條の殿の御有様思し出で、若き心に戀しと思しけるに、宮の御氣配(御氣配)も思ひ出でられて、をかしかりし御移り香もまた残りたる心地す。

大將殿は、宇治の御堂造り果てつと聞きて、自からおはしましたり。辨(ヒト)の尼君に、「常陸の女君は、さいつ頃二條の院におはすと聞きし。」など宣へば、辨、「一日北の方の文侍り、物忌に怪しき小家に隠ろへ給ふも心苦しきなど書かせ給ふ。」と申すに、「よき折なシなる。」と宣ひて、またの日、御車一つ宇治に遣し給ひければ、尼君乗りて三條のおはし所を訪ふ。女君嬉しくて呼び入れ給ひつ。宵うち過ぐる程に、大將も尋ね來給ひて、「月頃の思ひあまることも聞えさせむとてなむ。」といはせ給ふ。思ひよらぬ程なれば、人々も心騒ぎて、「いかなることにかあらむ。」といひあへり。雨や、降り來れば、空はいと暗し。田舎びたる實子の端つ方に居給ひて、

さしとむる葎(ワラ)や繁(ハ)き東屋(あづま)の
あまりほどふる雨そゝぎかな

○催馬樂、東屋、「東屋のまやのあまりの雨そゝぎ、我立ち濡れぬ、その戸開かせ。」による。「東屋」は、四方に屋根を、葎き下したる家。「まやのあまり」は、屋根の葎き下し。「開かせ」は、開き給へ。

○「鎮し止むる葎の繁き故か、中に入り難く、東屋の葎下しに立てるに、甚だしく雨降る。」止むる人のありてか、あまりに時の經るよの意なり。

○本篇の題はこの歌による。

とぎまかうざまに遁れむ方なければ、南の廂(ひなし)に御座引き繕ひて入れ奉る。女君は心安くも對面し給はぬを、人々押し出でたり。遺戸(あき戸)といふ物鎮したるをいさゝか明けたるに、いかゞし給ひけむ、大將の君ふと入り給ひ、女君の御有様いとらうたげなれば、見劣りもせず、いとあはれと思したり。程もなう明けぬる心地するに、鳥などは鳴かで、大路近き所に、おほどれたる聲して、何とも聞き知らぬ名乗(名乗)をし、うち群れて行くなどぞ聞ゆるを、大將殿は珍しくをかしと思す。御車妻戸(つもと)に寄せさせ給ひ、掻き抱(かきかか)きて乗せ給へば、尼君、この女君に添ひたる侍従(じゆわ)の御許も乗りつ。宇治におはし着き給ひて、こゝにありつる琴(こと)、箏(そう)の琴召し出で、獨り調べ給ふに、月さし出でぬ。「昔誰もくおはせし世に、こゝに生ひ出で給ひなましかば、今少しあはれは優りなまし。」など宣ふに、女君はいと恥かしく、白き扇(あはせ)をまさぐりたる側目(かたはらめ)、いと隈なう白くて、なまめいたる額髪(ひたひか)の隙など、いとよく思ひ出でられてあはれなり。

浮舟 うきふね

匂の宮は、なほかの夕を思し忘れず、人柄のをかしようもありしかなと思しわたる。大將殿は所狭き身の程に、容易くかの山里に通ひ給ふべくもあらず。女君待遠なりと思ふらむと心苦しう思ひ遣り給ひ、渡しまるべき所、忍びて造らせ給ひける。正月の朔日過ぎたる頃、宮、二條の院に渡りて若君を遊び給へる晝つ方、小さき童の緑の薄葉なる包み文の大きやかなるを小松につけて走り参る。中の君御覽じて御顔赤みたれば、宮怪しみて、取り見給へば、いと若やかなる手なり。「誰がぞ。」と問ひ給へど、「昔かの山里にありける人の女の文になむ。」などいひ紛らし給へど、宮は、かの思ひ渡る人のにやと思し寄りぬ。我が御方におはして「宇治に大將の忍びて夜泊り給ふ折もありと人のいひしは、かやうなる人を隠し置き給へるなるべし。」と、御文の御使に使ひ給ふ内記は、大將にも親しき人なれば、御前に召して問はせ給ふ。「さなむ下の人々申す。」と申す。宮は、いと嬉しくも聞きつるかなと思して、返す返すあるまじき事と思しながら、この内記に案内せさせて、御馬にておはしたり。内記は宿直人ある方には寄らで、葦垣仕籠めたる西面を、やをら壞ちて入れ奉る。格子の隙より覗き給ふに、火明うともして物縫ふ人三四人、女君は火を眺め居たるまみ、御髪のコぼれかゝりたる額つき、いとあてになまめき

て、中の君にいとよう似たり。宮は心も空にてなほまもりおはするに、やう／＼人々寝入りぬれば、忍びやかにこの格子を叩き給ふ。右近聞きつけて「誰ぞ」と問ふ。聲づくりに給へば、大將殿のおはしたるにやと思ひて起き出でたり。「まづ明けよ。」と宣ふ聲、いとよく大將にまねび似せ給ひ、「道にていと恐ろしき事のありつれば、怪しき姿になりてなむ。火暗うなせ。」と宣ふに、右近はあわて惑ひて、火は取り遣り、退きて皆寝つ。女君はたゞ夢の心地するに、年頃思ひ渡る様など宣ふに、この宮と知りて限りなう泣き給ふ。夜はたゞ明けに明く。宮、右近を召し寄せて、「今日は出づまじ。」など宣ふに、右近、いとあさましく呆れて、昨夜の過を思ふに、心地も惑ひぬべきを思ひ静めて、「かう遁れ難かりし御宿世にこそありけれ。」と思ひ返して、わりなく謀りて隠し奉る。女君も、「時の間も見ざらむは死ぬべし。」と思し焦るゝ宮を、志深しとはかゝるをいふにやあらむと思して、やう／＼靡きたるを、宮も限りなうらうたしと見給ふ。夜さり京へ遣しつる大夫参りて、「人に知らせ給はぬ御歩きに、中宮よりも御使参りて、左の大臣もむづかりまゐらせて。」など申せば、宮、「所狭き身こそわびしけれ。」と、うち歎き給ひて、我にもあらで出で給ふ。

大將殿は少しのどかになりぬる頃、例の忍びておはしたり。女君恥かしく恐ろしく、いみじう心憂し。この人に憂しと思はれて、忘れられなむ心細さなど思ひ亂れたる氣色を、殿は心苦しう思して、常よりも心止めて語らひ給ふ。山の方は霞隔て、寒き洲崎に立てる鷺の姿も、所柄はいとをかしよう見

ゆるに、宇治橋の遙々と見渡さるゝに、柴積み舟の所々に行き違ひたるなど、見給ふ毎に、なほそのかみの心地して、曉に歸り給ひぬ。

二月の十日の程、内裏に文作らせ給ふとて、宮も大將も参りあひ給へり。宮の御聲いとめでたくて、「梅が枝」など謠ひ給ふ。大將殿、「衣片しき今宵もや」とうち誦じ給へるを、宮聞き給ふにも、いと心許なく思し給ひければ、あさましう謀りて宇治におはしたり。一夜の程にて立ち歸り給はむもなかなかなるべければ、内記に謀らせ給ひて、河より遠方なる人の家に率ておはせむと、極き抱きて出で給ひぬ。右近は止りて侍従をぞ奉る。小さき舟に乗り給ひて、宮、

年經とも變らむものか橘の

小島の崎に契るころは

○「橘の小島の崎」は、宇治橋に近き所にあり。

女君御返、

橘の小島は色も變らじを

この浮き舟ぞ行方知られぬ

○この歌より、この女君を、浮舟の君といふ。

○本篇の題もこの歌による。

雨降り止まで日數経る頃、宮より御文あり。大將よりもあれど、女君は宮の言多かりつるを見つゝ臥し給へれば、侍従、右近見合はせて、「思し移りにけり。」と、いはぬやうにしていふ。大將殿は、造りたる所に急ぎ渡してむと思し立ち、いと忍びて障子貼らすべき事など宣ひつくるに、人しもこそあれ、この内記が知る人の親に宣ひつけたりければ、宮は聞き召していと思し騒ぎて、我が御乳母の遠き受領の妻になりて下るに語らひ給ひ、この月の晦日がたに下るべければ、やがてその日こゝに渡さむと思し構ふ。大將殿は卯月の十日となむ定め給ひける。女君の母北の方、宇治に参り給へば、乳母出で来て心地よげにいひ騒げど、女君は、「怪しからぬ事どもの出で来て、人笑へならば、誰もくゝいかに思はむ。」など思すに、心地悪しくて臥し給へり。母君、「物怪などにやあらむ。」と宣ふもかたはらいたく、我が身を失ひなばやと思ひつゝくるに、この水の音の恐ろしげに響きて行く。母君歸り給へば、「見奉らぬがいと心許なく覚え侍れば、諸共に。」など慕ふを、「かしこにも物騒がしく侍り。遠くとも今参り來む。」と、うち泣き給ふ。大將殿の御文は今日もあり。宮よりもあり。雨の降りし日來あひたりし御使どもぞ今日も來たりける。殿の御使の隨身、怪しと思ひて、供にある童男に、さりげなく見せければ、「宮に参りて、内記になむ御文は取らせ侍りつる。」といふ。明石の中宮、六條院に出でさせ給へる頃なれば、大將こゝに参り給へるに、宮は臺盤所におはしまして、内記より奉れる御文を取りて、引き開けて見給ふ。大將殿側目に見給ふに、紅の薄様に細かに書きたるなるべしと見ゆ。出で給へば、

御隨身参りて、しかく／＼と申して、「御文は赤き色紙のいと清らなるにと、下人の申し侍りつる。」と申すに、思し合はするに違ふことなし。「いと恐ろしく限なくおはする宮なりや。いかなりけむ序に、さる人ありと聞き出で給ひけむと、いと怪しからぬ御心かなと思す。棄て置きたらば、必ず呼び取り給ひてむ。」と思して、かしこへ、

波越ゆる頃とも知らず末の松

まつらむとのみ思ひけるかな

○末の松山は、陸奥の名所。「末の松山波越さじ」は、心の變らぬこと故、「波越ゆる」は、心の變ること。

女君は、いと怪しと思ふに胸塞りて、御文は、「所違にや。」と、そのまゝ返し奉りつ。遂に我が身は怪しからずなりぬべきなめりと思へば、反古など破りて、燈臺の火に焼き、水に投げ入れさせなど、やう／＼失へど、京へ御移ろひの御用意にやと、人々怪します。親を置きて亡くなる人は、いと罪深かンなるものをなど、さすがにほの聞きたることをも思ひ歎く。

彌生の二十餘日にもなりぬ。かの受領、二十八日に下るべしといへば、宮はその夜必ず迎へむなど宣ひて、御自ら忍びておはしたれど、例ならず宿直人、「あれは誰ぞ。」と聲々咎むるに煩しくて、内記に侍従を召し出でさすれば、侍従、有様委しく聞ゆ。夜いたく更け行くに、物咎めする犬の聲絶えず、

弓引き鳴らして、「火危し」などいふ聲するに、せむ方なくて泣く／＼歸り給ふ。女君かくと聞くにいと悲しく、

歎きわび身をば棄つともなき影に

うき名流さむことをこそ思へ

親もいと戀しく、例は殊に思ひ出でぬ兄弟も戀しく、中の君思ひ出づるにも、すべて今一度とゆかしき人多かり。夜となれば、人に見つけられず出で、行くべき方を思ひ設けつ、明け立てば、川の方を見遣るにも、羊の歩よりも程なき心地して、なほ身を投げつべきことは難げなり。京より母君の御文持て來たり。「忌々しき夢を見侍りつれば、よく慎ませ給へ。」とあるに、

後にまたあひ見むことを思はなむ

この世の夢に心まどはで

誦經の鐘の、風につきて聞え來るを聞きつ、萎えたる衣を顔に押し當て、臥し給へりとなむ。

蜻蛉 かげろふ

かしこには女君おはせぬを求め騒げど甲斐なし。右近、昨夜書き置き給ひし母君への御返を開けて見

て、足摺(あしずり)していみじく泣く。侍従もいかにしつることにかと心許なう思ひ感へば、乳母(めのと)は物も覺えず。宮も聞き給ひ、夢と覺えて、御乳母子(おんめのとこ)の時方をかしこに遣すに、乳母、「我が君やいづこにおはしましぬる。返り給へ。空しき死骸(しかい)をだに見奉らぬが甲斐なく悲しくもあるかな。」などいひ騒ぐを聞きつゝうち歎きて歸りぬ。雨のいみじかりつるに、母君も渡り給ひ、こはいかにしつることぞと感ふに、右近は、「なき影に」と書きすさび給へるものゝ、硯の下にありけるを見つけて、河の方を見遣りつゝ、響きのゝしる水の音を聞くにも疎ましく悲しと思ふ。母君、「さば、このいと荒ましと思ふ河に流れ失せ給ひにけり。」と思ふに、いとゞ我も落ち入りぬべき心地ぞする。

大將殿は御母入道(おんぼにりだう)の宮惱み給ひければ、石山(いしやま)に籠り給ひける頃にて、御使(おんつかひ)ばかり參らせ給ひ、あさましと思ひ、「鬼(おに)などや住むらむ。いかでさる所に置きたりけむ。」と、御胸(おんむね)いたく覺え給ふ。月立ちて大將殿、宇治におはして、右近を召し出で、有様委しく問はせ給ひ、つくぐとうちながめつゝ、「宮を珍しくあはれと思ひまゐらせても、さすがに我をも疎(おろ)には思はざりける程に、この水の近きを便(たより)にて、かく思ひ寄りしなりけむかし。我がこゝに置かざらましかば。」と、よろづいとほしく、水の音の聞ゆるに、死骸(しかい)をだに尋ね得ず、あさましくて止みぬるかな。いかなる様にて、いづれの底のうつせに混りけむなど、遣る方なく思ふ。四十九日(よそひ)の業(わざ)などせさせ給ふにも、いかゞなりけむことにかと思ふ。怪しくつらかりける契(ちがひ)どもを、つくぐと思ひつゝけながめ給ふ夕暮、蜻蛉(かげみよ)の物はかなげに飛び違ふ

ありと見て手には取られず見ればまた
行方も知らず消えし蜻蛉

○「蜻蛉」は浮舟の女君をいふ。
○本篇の題はこの歌による。

手習 てならひ

その頃横川(よこがわ)に某僧都(むかししやうぶ)とかいひて、いと尊き人住みけり。八十餘の母尼君、五十ばかりの妹尼君、舊(ふる)き願(ねん)ありて長谷(ながたに)に詣づるに、弟子(でし)の法師添へて遣りけり。奈良坂(ならさか)といふ山越えける程より、この母尼君、心地悪(こころい)しうしければ、宇治のわたりに知りたりける人の家ありけるに止めて、横川(よこがわ)に消息(せうそく)したり。僧都(しやうぶ)驚きて急ぎおはして宇治の院といふ所に移して、經など讀みたるに、森かと思ゆる木の下に、白き物ぞ廣(ひろ)りたる。「狐(きつね)の變化(へんげ)したるか。」などいひて、法師(ほふし)歩み寄れば、髪(かみ)はつや／＼として、大きな木の根の、いと荒々しきに寄り居て、いみじう泣く。雨いたく降りぬべきに、僧都(しやうぶ)、「かくて置いたらば死に果て侍りぬべし。」とて、抱(いだ)き入れさせ給ふ。妹(いもうと)の尼君聞き給ひて、急ぎて行きて見るに、いと

手習

若う美しげなる女の、白き綾の衣一襲、紅の袴ぞ着たる。香はいみじう香ばしくて、あてなる氣配限りなし。たゞ我が戀ひ悲しぶ亡き女の歸りおはしたるなんめりとて、手づから御湯掬ひ入れなどし、添ひ居て加持(カチ)などせさせ、母尼君もよろしくなり給ひければ、車二つして、比叡坂本(ヒエノサカノもと)に小野といふ所に率(ひら)て参りぬ。「いかでさる田舎人の住むあたりに、かゝる人の落ちあふれけむ。物詣(ものまう)などしたりける人の、心地など煩(わづ)ひけむを、繼母などやうの人謀りて置かせたりけるにや。」などぞ思ひ寄りける。「河に流してよ。」といひし一言より外に物も宣はず。とかく扱ふ程に四五月も過ぎぬ。僧都山より下りて夜一夜加持(カチ)し給へる曉に、物怪調(ものけつてう)せられて、正身の心地さわやぎて見廻(みめぐ)らしたれば、見し人の顔は一人もなく、知らぬ國に來にける心地して、いと悲し。たゞ我は身を投げし人ぞかし。いづくに來にけるにかと、せめて思ひ出づれば、いとみじと物を思ひ歎きて、皆人の寝たりしに、妻戸(つまど)を放ちて出でたりしに、風烈しう川波も荒う聞えて、獨り物恐ろしかりしかば、來し方行く先も覺えず、寶子(たからこ)の端(は)に足をさし下しながら行くべき方も惑はれて、返り入らむも中空(なかぞら)にて、心強(こころたか)くこの世に失せなむと思ひ立ちしを、嗚呼(ああ)がましう人に見つけられむよりは、鬼も喰(く)ひて失ひてよと、つく／＼と居たりしに、いと清げなる男の寄り來て、「いざ給へ、おのが許へ。」といひて抱く心地のせしを、匂(にお)の宮のし給ふと覺えし程より心地違(ちが)ひけるなんめり。知らぬ所に据ゑ置きて、この男は消え失せぬと見しに、遂にかく本意(ほんい)のこともせずなりぬると思ひつゝ、いみじう泣くと思ひし程に、その後のことは、絶えていかにもく

覺えず。遂にかくて生返りぬるかと口惜しく思ひ給へり。妹の尼君は上達部(かんだちべ)の北の方にてありけるが、その人亡(な)くなり給ひて後、女たゞ一人をいみじくかしづきて、よき君達(きみたち)を婿にし給ひけるに、その女も亡くなりければ、形を變(か)へてかゝる山里には住み初めたるなりけり。戀ひわたる人の形見もがなと思ひ歎(なげ)きけるを、かく思はぬ人の、容貌(かたち)も優りざまなるを得たれば、怪しき心地しながら嬉しと思ふ。秋になり行けば、松蔭繁(まつかげ)く、風の音も心細きに、つれ／＼と行(ゆ)をのみしつゝ、尼君ぞ月明(つき)き夜は琴など弾き給ふ。女君手習(にきみ)に

身を投げし涙の河の早き瀬を

しがらみかけて誰か止めし

○本篇の題はこの「手習」による。

尼君の昔の婿の君は、今は中將にて、一日こゝにおはしたり。女君の後手(うしろ)を見つけて、怪しと思ひ、尼君に、「忍びたる様にておはし給ふらむは誰にか。」と問ひ聞きて、御消息(ごせうし)あれど、答なし。八月十餘日の程に、小鷹狩(こたかがり)の序におはして、「一目見しより靜心なくてなむ。」など、また御消息あり。尼君様々にこしらへ宣へど、女君、「いひ初めぬれば、かやうの折々に責められむ。」と、答をだにし給はず。九月になりて、この尼君達、また長谷に詣(まう)づるに、「いざ給へ。」と勸むれど、女君は、「心地悪し。」とて止りたりけるに、法師ばら來て、「一品(いちひん)の宮の御物怪(ごぶつが)に惱ませ給へば、僧都今日下りさせ給ふ。」と

いふ。女君、恥かしけれど、逢ひて、尼になし給ひてよといはむと思ひ、鏡など見給ひて、「親に今一度かうながらの様を見せずなりなむ。」と思ふにいと悲し。暮方に僧都おはしけり。「またいと行く先遠げなる御程に、なか／＼罪ある御事なり。」と諫め給へど、女君、切に宣へば、さるやうこそはあらめと思して、御髪削ぎまゐらす。人々、「いと悲しきことに侍る。」といへど、女君は、「今は心安く嬉し。」と、胸の明きたる心地ぞし給ひける。物詣の人歸り給ひて、思ひ騒ぎ給ふこと限りなし。

一品の宮は、僧都加持参りて怠らせ給ひければ、いよ／＼尊きものにいひのゝしる。僧都、中宮もおはします御前にて物語などし給ひける序に、「この三月にいと怪しく稀有のことをなむ見侍り。」とて、かの女君のこと語り出づるを、大將殿の忍びて語らひ給ふ小宰相の君聞きて、なほ委しく問ひ聞き、その頃かのわたりに消え失せにけむ人を思し出でたり。

年も返りぬ。小野には尼君の兄弟の紀の守なりける人、この頃上り来て、「右大將殿、去年の春失せ給ひにし故八の宮の御女の御忌の事せさせ給ふに、某も装束一領調じ侍るべきを、せさせ給ひてむや。」などいふ序に、「大將殿川近き所にて、水を覗き給ひていみじく泣き給ふ。」などいふに、女君、忘れ給はぬこそはとあはれに思す。大將はこの御忌の業などせさせ給ひて、はかなくても止みぬるかなと思し、かの常陸の守の子ども元服したりしは藏人になし、我が御司の將監になしなど勞り給ひけり。雨など降りてしめやかなる夜、中宮に参り給へりしに、宮、小宰相して、小野の女君のこといひ出でさ

せ給へば、珍らかに怪しとも、いかで驚かれ給はざらむ。所も變らず、その頃の有様など思ひ合はするに、違ふ節なければ、住むらむ山里はいづこにかあらむ。いかにして様悪しからず尋ね寄らむ。僧都に逢ひてこそは確かなる有様聞き合はせなどして、ともかくも訪ふべかんめれなど、たゞこの事を起さ臥し思す。

夢浮橋

ゆめのうきはし

大將殿、山におはして、例せさせ給ふやうに供養せさせ給ひ、またの日横川におはして、僧都に對面して委しく問ひ給ふ。僧都、「さればよ、只人と見えざりしを、心もなく形をやつさせける。」と、胸潰れて、細やかに物語るに、大將殿、「眞にこそは。」と思す程、夢の心地し給ふ。「いと便なしと思すべけど、かしこへしるべし給ひてむや。」と宣ふに、僧都、「今日明日は障り侍り。月立ちて御消息聞えむ。」といふに、あへなくて歸り給ふ。御供に率ておはしたりし常陸の小君を呼び出で給ひ、「これなむその人の近き縁に侍り。まづこれをかしこに遣しなむ。御文一行賜へ。」と宣へば、僧都、文書きて取らす。小野には、女君、いと深く繁りたる青葉の山に向ひて、遺水の螢ばかりを眺め居給へるに、前驅心殊に追ひて、いと多うともしたる火の光見ゆ。「大將殿のおはしたるなり。」など聞き給ふに、聞き知りたる

隨身（ずしん）の聲（こゑ）もうち混りて聞ゆるに、いと心憂し。大將殿、またの日、かの小君（こぎみ）に、常に遣はし、隨身添へて御消息奉り給ふ。かしこにはつとめて僧都（そうず）より御文あれば、尼君驚きて、「心憂く隠し給ひける。」と恨み給ふ程に、小君（こぎみ）参りたり。僧都の添へたりける御文もあり。女君、少し外様（あさま）に向きて見給へば、母君のいとかなしくして、宇治にも時々率ておはせしかば、今はと思ひし夕暮にも、いと戀しと思ひし小君（こぎみ）なりけり。なか／＼これを見るにいと悲しくて、ほろ／＼と泣かれぬ。尼君、「少し似給へれば、御兄（おにい）弟にこそはおはすめれ。」などいへど、女君、「たゞ一人おはせし母君になむ對面せまほしく思ひ侍る。この外には誰にもく知られじと思ひ侍る。餅事（もちごと）なりけりと、もて隠し給へ。」と宣へど、尼君、「いと難いことかな。」とて、母屋（もや）の際（さへ）に几帳（きやう）立て、小君を入れたり。小君、「人傳（ひとつて）ならで奉れと宣ひつる。」とて、大將の御文奉りつ。尼君、御文引き解きて見せ奉る。ありしなからの御手にて、紙の香（か）など例（れい）の染みたり。御文、

法の師（し）と尋ぬる道をしるべにて

思はぬ山にふみ惑ふかな

○「佛道を尋ぬる僧都を案内にして、却りて思ひ掛けぬ物思に惑ふ。」

さすがにうち泣きてひれ伏し給ひ、尼君に、「御返いか聞えむ。」と責められても、「怪しういかなりける夢にかとのみ心も得すなむ。今日は持て歸り給ひぬ。」と、顔も引き入れて臥し給へば、尼君、「御

物怪（ものけ）にておはすらむ。」などいふ。小君、「わざと奉りし験（しるし）に、たゞ一言を宣はせよかし。」といへど、甲斐なければ、心ゆかずながら歸りぬ。大將殿はいつしかと待ちおはせしに、かくたど／＼しくて歸り來たれば、すさまじく、なか／＼なりと思し給ひ、人の隠し置きたるにやあらむなど思し給ふとぞ。

1007
13

昭和二十年五月一日印刷
昭和二十年五月五日發行

(非賣品)

著者 吉田三男也

東京都芝區田町四丁目六番地

發行者 矢田直三

東京都目黒區下目黒二丁目四六九

印刷者 淺葉作三

東京都目黒區下目黒二丁目四六九

印刷所 合名會社淺葉印刷所

東京都麻布區本村町一四六番地

發行所 吉田先生勤績記念會

Handwritten musical notation on a five-line staff.

913.36
486

20 年 9 月 29 日 .5-1

Vertical stamp with Chinese characters: 廣東省立圖書館藏

終

